

『ロドギュヌ』におけるクレオパトルに関する考察

小林 卓

序	30
§ 1 クレオパトル.....	32
§ 2 双子の王子.....	38
§ 3 ロドギュヌ.....	48
§ 4 太母としてのクレオパトル.....	53

序

この作品がコルネイユの嗜好にあったものであったことは様々な点から推測できる。たとえば、1660年に書かれた *EXAMEN* の中には、宮廷で私のもっとも好きな作品は何かという質問をよく受けたが、皆様方が『シンナ』や『ル・シッド』と答えるものとみなしていたので、あえてこの作品を挙げる訳には行かなかったという主意のことを述べている。^{*1}この作がいわゆる四大傑作とは色合いのかなり違った作品であることは一読して瞭然である。四大傑作（『ル・シッド』から『ポリュウクト』に至る作品群）は、教室で読めるという意味で全くクラシックな作品である。それらは訓育的であり、現にフランスの学生には読むことが強制され、著名な長台詞には暗唱を課され、また、課題をあげられて国語教育が模範とする答えを見つけなければならないなど、学生にとってはおぞましい古典になってしまっている。『ロドギュヌ』はそのようなものではない。その主人公クレオパトルは道徳的な人物でもないし、教育の現場で取り上げるに値するキャラクタとはとても言えないだろう。彼女に関する伝統的解釈は、古今を通じて優勢なモラリスティックな批評のお陰で辛辣否定的なものであった。作者自身がクレオパトルについて《かくも陰惨で道に外れた行為を為し得る》^{*2}とか、《彼女はきわめて極悪であり、どんな肉親殺しも彼女にとっては厭わしいものではない》^{*3}と言っているくらいである。にもかかわらず、コルネイユにとって、この作品が好みのものであったことは、自身の率直な嗜好と道徳の分離を意味するがために、作者自身にも不安をかきたたずにおかなかったであろう。そこで、コルネイユにしばしば見られる *casuistique* な弁解がなされるのである。よ

く知られた《これらの罪悪には何かしらとても高貴な魂の偉大さを伴っているので、その行為は厭うべきものだが、その行為の源泉は賞賛に値するのである》*⁴一読すれば分かるような気がするが再読すると意味不明となる類の文章である。ドゥブロフスキは行為は悪だがその源はよいなどあり得ないと一蹴しているが*⁵確かに、クレオパトルを道徳的に弁護することは不可能である。*⁶ドゥブロフスキは同じ箇所、道徳的に救済するのは失敗しているが劇的に成功していることでコルネイユはこの作品の弁護をしようとしていると述べている。*⁷だが、この点についても、多くの批評家の攻撃を受けてきたのである。〈真実らしさ〉が欠けている。とても本当とは思えない込み入った筋立て。即ち、ラシーヌに代表される古典主義的美学を信奉する批評家達の悪評が長きにわたって続いたのである。にもかかわらず、『ロドギユヌ』がコルネイユの多数の作品の中で、長きにわたって読まれ、或いは上演され続けてきたという事実は、ドゥブロフスキのいう劇的成功を肯定するものだろう。古典主義美学という先入観を取り去れば、この作品はドラマツルギー的には成功した実に面白い劇作なのである。一読しただけでは理解しがたい入り組んだ錯綜した筋立て、そのよい例を上げれば、アンチオキユスという名がここでは三人の登場人物に当てられている。まず、クレオパトルの初めの夫ニカノル、次にニカノルの弟でありクレオパトルの二番目の夫、そしてクレオパトルの二人の子供の中の一人にという具合である。そして、ちりばめられた多数の大小のサスペンス。コルネイユはあたかも観客や読者の理解力を試して楽しんでいるかのようであり、この悲劇のもつ〈implex〉は多数の批評家が悲嘆したように欠点と言うより、むしろ魅力の一つとさえとれるのである。それをあたかも巧妙に組み立てられた推理小説のごとく一つずつほぐして終幕の山場に上り詰める技巧は、劇作家コルネイユの技倆を存分に発揮したものであり、コルネイユが密かに自負したのも当然と言えよう*⁸。コルネイユの多数の忘却に沈んだ作品群の中にあつて、未だに生きている作品である事実は、批評家や理論家の悪評にもかかわらず観客の支持をとりつけていることの紛れもない証拠*⁹であるし、その理由を探ることは決して無駄骨ではないであろう。

ただし、私はここでこの戯曲をドラマツルギー的にその面白さを論じようとしているのではなく、作品の内容に立ち入って、特にその主人公であるクレオパトルについて、今まで余りにないがしろにされてきたキャラクタ、或いは余りに皮相的に単純に悪罵されてしまった主人公について論じたいと思うのである*¹⁰。この作品の魅力は、単にドラマツルギー的な優れた技巧によるのではなく、主人公クレオパトルの人物像が観客に強くうったえるところにもあると思うからである。

§ 1 クレオパトル

コルネイユはクレオパトルについて、この作品に付した序の中で *〈cette seconde Médée〉* *¹¹ と叙しているが、これが女王の評価に決定的な影響を及ぼしたようである。確かに二人とも、夫と子供を殺害し、その復讐の怨念のはてなさはもはや人間の限界を超えてしまったような身震いを感じさせるほどのものである。しかしながら、メデの場合夫ジャゾンの愛の裏切りへの復讐としてかなり明快に解釈できるのに反して*¹²、クレオパトルの場合はことはそれほど単純ではない。

クレオパトルの場合も、復讐、憎しみという語は頻繁に出てくるが、ニカノルがロドギユヌと結婚してパルティアにやってくることをニカノルの裏切りと単純に断定するわけにもいかないだろう。女王自身、ニカノルの死という虚報に踊らされたとはいえ、ニカノルの弟アンチオキユスと結婚するといういわば重婚をしているのである。クレオパトルとニカノルの関係は愛の裏切り、或いは嫉妬と言う情念の問題というよりもっと他の側面が大きいのである。この点で、クレオパトルが妻としての自らの身の潔白を主張したのは決して的是はずれではないし、

Je te dirai bien plus: sans violence aucune
 J'aurais vu Nicanor épouser Rodogune,
 Si content de lui plaire et de me dédaigner,
 Il eût vécu chez elle en me laissant régner.
 Son retour me fâchait plus que son hyménée,
 Et j'aurais pu l'aimer, s'il ne l'eût couronnée. 463-468

この台詞が示すように、ニカノルとロドギユヌの結婚を平然と認めることができるのであり、少なくともクレオパトルの側にあつて、愛の裏切りという問題は小さく彼女の激情を燃え立たせたものはそうしたものではない。

そこで、女王を権謀術策に長けた権力欲の権化という見方が多くなされる結果となる。それは、全くの見当外れの解釈とは言えない。実際、クレオパトルの王位への執念は何物にもまさる情念である。

Vois jusqu'où m'emporta l'amour du diadème, (nous soulignons)
 Vois quel sang il me coûte, et tremble pour toi-même.
 Tremble, te dis-je, et songe en dépit du traité

Que pour t'en faire un don je l'ai trop acheté. 423-426*¹³

ここでロドギユヌに向けられた憎しみの暴発は、最初の夫ニカノルを取られた嫉妬心などから発するものではない。ロドギユヌが王妃として君臨することがどうしても耐えられないのである。長いシリアとパルティアとの戦闘に終結が付き、和平が結ばれ、その徴としてクレオパトルの長子とロドギユヌの婚儀が盛大に執り行われようとしているこの日、女王クレオパトルの憤激は募るばかりなのである。この日は女王が王冠を手放し、ロドギユヌに渡す日であるからである。ヒロイズムの文脈から辿るならば、ヒーローはオギュストのごとく正統な君主 (monarque) *¹⁴に変貌することで正統性と権威を獲得できるのであるが*¹⁵、正統性と権威というものは一度確立した後は、血筋が証拠立てるものであり、このことはコルネイユの劇的世界の黄金律であった。それは言うまでもなく、クレオパトルの政治的確信であった。シリアの正統な支配権はニカノルにあり、彼の死後はニカノルの長子の掌中に帰するものであった。クレオパトルが自らの子供にシリアの支配権を伝達するために彼女が払った労苦は苦心惨憺たるものであった。女王が自ら言うように《王位は途方もなく高い値段のもの》426で、たやすく譲れるものではない。ニカノルがパルティア遠征で敗北を喫し捕囚の身になったのに乗じてトリフォンが反乱を起こした。シリアにはニカノルは戦死したという虚報が届いていたのである。そこで、女王は二人の王子をエジプトに退避させるとともに、ニカノルの弟アンチオキユスと結婚し、窮地を挽回したのである。アンチオキユスはトリフォンの謀反を鎮圧し、ついで兄の仇を討つためにパルティアに攻撃をかけたが、敵の掌中に陥る前に自害して果てる。ところが、図らずもニカノルはパルティアで囚われの身として生きていた。そして、クレオパトルの再婚を裏切るとみなして立腹し、パルティアの王女ロドギユヌと婚約してシリアに攻め上ったのである。クレオパトルを女王の座から引きずり降ろして屈辱を味合わせ、かつ彼女の子供から王位継承権を剥奪しようとする意図であった。この戦闘で女王は待ち伏せをかけてニカノルを殺害し、ロドギユヌを捕虜にするという勝利を得た。ここで、パルティア側は再度、シリア征伐を試み優勢に戦いを進めたため、シリア側も和平を申し込む羽目になり、パルティアはそれを拒否する勢いであったが、王女ロドギユヌが捕囚の身であることから和睦に応じるようになった。その取り決めが、クレオパトルの長子がシリアの王位と領国を獲得し、かつロドギユヌを王妃として娶ることであった。

このような複雑な政略のせめぎあいを見るならば、女王を単なる権力欲の権化とか血に飢えた野獣と決めつけるのは単純すぎよう。彼女が身の証をたてることができず、前夫ニカノルの憤激と復讐を避けることができなかつたのは、彼女の全面的な責任に帰すことはできないだ

ろう。そして、ニカノルの殺害から以下の経緯はもうことの成り行きと言うしかないだろう。それでも、政治的に見るならば、女王は権謀術数に長けた政略家と評することに異存はない。

Si je cache en quel rang le ciel les a fait naître,
Vois, vois que tant que l'ordre en demeure douteux,
Aucun des deux ne règne, et je règne pour eux.
Quoique ce soit un bien que l'un et l'autre attende,
De crainte de le perdre aucun ne le demande;
Cependant je possède, et leur droit incertain
Me laisse avec leur sort leur sceptre dans la main:
Voilà mon grand secret. 444-451

双子の兄弟の出生順を秘しておいて、実質的な支配権を我がものとしようとする配慮。或いは、王子達をエジプトの兄弟のもとに避難させておいた理由について、次のように夫アンチオキユスの権力を制限するためであることを打ち明けている。

Il(Antiochus) occupait leur trône et craignait leur présence,
Et cette juste crainte assurait ma puissance.
Mes ordres en étaient de point en point suivis,
Quand je le menaçais du retour de mes fils.
Voyant ce foudre prêt à suivre ma colère,
Quoi qu'il me plût oser, il n'osait me déplaire,
Et content malgré lui du vain titre de roi,
S'il régnait au lieu d'eux, ce n'était que sous moi. 455-462

さらに、女王がどれほど王位への執念に燃えていたかを示すのは、次のような決定的な台詞でありクレオパトルの本性を赤裸に示したものである。

Je fis beaucoup alors, et ferais encor plus
S'il était quelque voie, infâme ou légitime,
Que m'enseignât la gloire ou que m'ouvrît le crime,
Qui me pût conserver un bien que j'ai chéri

Jusqu'à verser pour lui tout le sang d'un mari. (nous soulignons) 471-474

彼女が至上の価値とする王位のためならば、恥も合法性も、栄光も罪もなんら分けられるものではない。それを保持するためならば、夫の血を流すのもかまわない。この台詞から、多くの人はクレオパトルを単なる権謀に長けた政略家ではなく、おぞましい不道德な非人間的な者と解釈した。道徳性の欠如が何を意味するかを考察することもなく、自分のもつ近代的な道徳規準をもってクレオパトルを裁いたのである。

女王にとって何にも代え難い絶対的な価値である王位を手放さなければならないこの日、それは破滅の日になるはずであるが、彼女の台詞は自信に溢れた自己主張に裏打ちされている。

Délices de mon cœur, il faut que je te quitte.

On m'y force, il le faut, mais on verra quel fruit

En recevra bientôt celle qui m'y réduit.

L'amour que j'ai pour toi tourne en haine pour elle:

Autant que l'un fut grand, l'autre sera cruelle,

Et puisqu'en te perdant, j'ai sur qui m'en venger,

Ma perte est supportable, et mon mal est léger. 476-482

クレオパトルを術策に満ちた非道徳的な権力欲の権化という見方をとるならば、上述の台詞をどのように解釈できるのであろうか。

例えば、ドルトにとってヒーローとは何よりも国家の統一を至上価値として、そのためには私的情念はもとより他の価値をも犠牲するに厭わない人間を意味する。歴史的に言えば、リシュリューとルイ13世の死が封建制下の分裂と統一のせめぎあいのもとにあったフランスを解体してしまった。フランスはもはや統一の原理、それを具現化したヒーロー、その最上の例はオギュストであるが、を失うことになったのである。^{*16}従って、オギュストの後に登場するヒーローであるクレオパトルは権力を欲求しそれを欲することにおいて無上の執心を示すが、それは私情を抑圧しても解体した国家を再統一しようという政治的動機を持ったものではなかった。《彼女は単なる女王、国家よりも自らを優先するコルネイユ的ヒロインに過ぎない》^{*17}クレオパトルにとって権力とは、個人的な権力や栄光に達するための手段であったのである。つまり国家はクレオパトルによって私物化されたのであった。ドルトはフランスの17世紀史とコルネイユ劇を連動させ、コルネイユ劇に17世紀フランス史を読み込んだ批評家である。それは先行するベニシューの批評^{*18}のさらに緻密な発展とも言えるが、このような

見地を取る限り、コルネイユの英雄を政治的な角度、ことに王位をめぐる権力闘争からスポットを当てるように制限されざるを得ないだろう。そして、英雄の正統性はその政治的動機の純粋性によって測られることになる。

ドゥヴロフスキはドルトの業績をふまえた上で、それを17世紀フランス政治史の枠組みの中に閉塞することから解放し、より普遍的な人間の精神の運動の文脈に重ね合わせて読み込もうとした。彼にとってヒロイズムとは次の文章に要約できよう。《英雄は、貴族的秩序を維持しようとする限り、君主 *monarque* に向かって自らを超越していかなければならない。その道筋において、英雄は自然との争闘に出会う。なぜなら、自然を制圧することなくしては、ヒロイズムも君主制も存在しないからである。自然の内部に肉化されている限りの自己を放棄することによって、自己を脱自然化 *dé-naturant* しつつ自由は問題解決を決行することになる》*¹⁹ドゥヴロフスキによれば、英雄はもはや血筋という自然によって正統性を維持できるのではなく、自然との苦渋に満ちた果敢な死闘を挑み勝利することによって、英雄は政治的にも倫理的にも自己の紛れもない正統性と権威を自己自身に向かって、そして大衆に対して得るのである。ところで、クレオパトルはこのような英雄的企図において挫折する。クレオパトルは王位への高い価値づけにもかかわらず、自然の奴隷に止まり、ドゥヴロフスキによれば女性*²⁰という生得の条件を否認するために王位を利用しているだけなのである。*²¹クレオパトルはIV幕最後の独白で、

Je sais bien qu'en l'état où tous deux(deux princes) je les voi,
Il me les faut percer pour aller jusqu'à toi(Rodogune);
Mais qu'importe: mes mains sur le père enhardies
Pour un bras refusé sauront prendre deux vies,
Leurs jours également sont pour moi dangereux,
Sors de mon cœur, nature, ou fais qu'ils m'obéissent:
Fais-les servir ma haine, ou consens qu'ils périssent.1485-1492

この有名な台詞にもかかわらず、自然は女王の心胸を去ることはなかった。ここで言う自然は二人の王子への母親らしい感情と言うような皮相的なものではない。彼女は二人を殺そうとしたのであるから、そうしたセンチメンタルな感情を指しているものではないことは明瞭であろう。そうした意味での浅薄な感情、自然は彼女の胸から亡くなっていると言ってかまわない。クレオパトルの挫折が、究極的には自然を制圧できなかったことを意味するとは、もっと本質的に、彼女が脱自然化 *se dénaturer* できなかったということなのである。それは女王が生

まれたとき、もって生まれた性を否認することは不可能であったという意味である。それは彼女がこの世界の中に肉体を持った存在として誕生するための必須の条件だったのであり、肉化において人間は必然的に性を割り振られるのである。人間存在とは中性的存在ではあり得ず、必ず性的存在なのである。ところで、肉化の否定が不可能であるのと同じく、性の振り分けの否定も不可能なのである*²²。クレオパトルにできることは、そして今日の多くのフェミニストにも言えることは、女性という自らに定められた性的在り方の否定を敢行しようとして、反対の性即ち男性になることによって女性からの解放という命題をすり替えることである。より正確に言えば、男性になることはできやうがないので、男性の模倣をするしかないのである*²³。彼女たちは女性という生来の条件を超越しようとして、常に女性という自然に捕らわれ、足をすくわれてしまっているのである。クレオパトルの英雄的企図が〈性と死闘〉に挑み優位を占めることであるとしたら、その挫折は不可避だったと言わねばならない。

以上、ドルトとドゥヴロフスキのクレオパトルへの見方を紹介したが、ドルトは個人的な栄光を欲するがために王冠に執心し、ドゥヴロフスキによれば、生得の自然的な性、あえて言うなら劣等な性*²⁴を超克するために王冠はなくてはならぬものであったと言うことになる。彼らの批評によって、少なくともクレオパトルは権力欲の権化であるとか、血に飢えた怪物であるといった長い間着せられてきた浅薄な汚名は消され、より立ち入った分析が始まったと言えよう。ただし、ドルトもドゥヴロフスキも女王の王冠への人並みはずれた執着を目にして、どうしても女王の振る舞いを政治的枠組みから完全に解放することはできなかった。そのため、クレオパトルの異常な人並み外れた〈王冠への愛着〉の底に何があったのかまで論議を進めることはかなわなかったのである。例えば、

Souvent qui tarde trop se laisse prévenir.

Allons chercher le temps d'immoler mes victimes,

Et de me rendre heureuse à force de grands crimes. (nous soulignons)1494-1496

この罪に陶醉するかのとき女王の心底には何が潜んでいたのか。血への渴望、生贄への愛着が、ドゥヴロフスキの言うように野獣の本性を現していないとすれば一体何に由来するのであろうか。彼らはそれらの疑問に答えることなく終わっている。

『ロドギユヌ』以降、正統な王位を確保して、国家或いは帝国の再建を図ろうとするヒロイックな王妃達が幾人も登場するが、彼女たちが直面した最大の障碍はその性であった。彼女たちはその性の故に、正統性を我がものにするのがかなわず、男性を媒介にしてしか正統な君主として君臨することができないのである。このことは、クレオパトルの例が十分に示して

いる。彼女の苦心惨憺にもかかわらず、結果的に王位を手放さなければならなかった最大の理由は、彼女が女性であることにあった。

これまでのコルネイユ劇は、ヒロイズムの観点からするなら、常に人間にまとりついて離れぬ自然との敢然たるそして悲劇的な死闘であった。ただし、主人公は男性であり己の自由を貫徹するために、他者、自己の肉体、感情、情念、欲求などと闘ってきたのであった。男性は無論男としての在り方を自然から振り当てられているのだが、ヒロイズムにおいては男性的な自我や意識は障碍になることはなくむしろ有利に働いた。だが、女性が英雄的投企に投じる場合、性との闘いという新しい要素が加わることになる。そのために後半のコルネイユ劇では、英雄は多く女性に変わり、彼女たちと〈性〉を介しての自然との死闘とのかかわりがコルネイユ的ヒロイズムの前面に出てくることになったのである。ここで、ヒロイズムは〈性との死闘〉という前例のない勝ち得ない闘いに直面し、遂にはおのれの限界を露に暴露する結果となろう。

これまで、クレオパトルについて政治的文脈からの分析について見てきた。権力欲の権化から、権謀術策に長けた政略家、血に飢えた非人間的な怪物、自らの権力と栄光に執着した野心家、その人間的条件から政治的正統性を得られなかった女王と様々な見方が交錯してきたが、これ以上女王について考察するためには他の登場人物についても瞥見する必要がある。

§ 2 双子の王子

クレオパトルにはニカノルとの間に双子の王子、アンチオキユスとセルキユスがあり、二人の出生順の秘密を握っていることが彼女の支配権の源泉であることは前述した通りである。この場合、実際に知っているということより、知っていると思われていることが政治的に意味を持つのであり、おそらく女王自身も本当のところは知らないのではないかと思われる。ところで、この二人の王子はシリアの王位と領土をめぐる激しい対立関係に入るかと思うとそうではない。ドゥブロフスキは《性の倒錯》*²⁵と述べているが、女性が王位を確保しようと言うヒロイックな企図に動機づけられているのに引き較べ、彼らにはそのような動機がないのである。アンチオキユスは舞台上に登場するや早々、

Va le voir de ma part, Timagène, et lui dire
 Que pour cette beauté je lui cède l'empire,
 Mais porte-lui si haut la douceur de régner,
 Qu'à cet éclat du trône il se laisse gagner,
 Qu'il s'en laisse éblouir jusqu'à ne pas connaître

A quel prix je consens de l'accepter pour maître. 91-96

と述べ、セルキユスに王冠を譲渡するとともに、より価値のある美女（ロドギユヌ）を我がものにするというたくらみを洩らしている。一方では、ロドギユヌのもとに使いをやり、

Et vous, en ma faveur, voyez ce cher objet,
Et tâchez d'abaisser ses yeux sur un sujet
Qui peut-être aujourd'hui porterait la couronne,
S'il n'attachait les siens à sa seule personne,
Et ne la préférerait à cet illustre rang
Pour qui les plus grands cœurs prodiguent tout leur sang. 97-102

と言わせている。国家に正統な王朝を創建するというヒロイズムの課題に身を挺するという英雄的企図は跡形なく崩壊し、国家の支配権は交換価値に墮し、しかも一人の女にも値しないという情けない有様になってしまったのである。そして、事情はセルキユスも同様である。

[je] vous cède

Tout ce que la couronne a de charmant en soi.
Oui, Seigneur, car je parle à présent à mon Roi.
Pour le trône cédé, cédez-moi Rodogune,
Et je n'envierai point votre haute fortune. 120-124

王冠を譲るという謙譲の美德の影に潜むのは、ロドギユヌの美貌にうたれたリビドーの高まりであり、王子達においてヒロイズムは喪失してしまった。彼らはその生物学的性はどうかあれ、実質的には〈女〉に墮したのである。次の台詞はそれを明快に表現している。

Un grand cœur cède un trône, et le cède avec gloire: (nous soulignons)
Cet effort de vertu couronne sa mémoire,
Mais lorsqu'un digne objet a pu nous enflammer,
Qui le cède est un lâche et ne sait pas aimer. 151-154

男であれ女であれ、このような言葉を語ったコルネイユ的英雄は存在しない。〈女〉に墮落したとは、ヒロイズムの要求する峻険な〈自然との死闘〉から逃走し男性的な意志を持って闘うことを放棄したことである。こうして英雄的投企から墮落し、その墮落を偽装するために〈humain〉な仮面を身につけた人物はコルネイユ的な〈généreux〉と並行して常に存在した。キュリアス、サビーヌなどがそうである。彼らは〈humain〉という見てくれのいい仮面の下に怯懦を隠し、英雄としての義務である英雄的企図の遂行に投身することを回避した。ドゥヴロフスキは〈bons sentiments〉と倫理は両立しないと述べているが*26、ヒロイズムはもっとも困難な途を選択するのであり、安易や安逸を貪るものには無縁なのである。そのような者たちは状況を可視できず事態に対処する術も知らず全く受動的な立場に置かれ、出来合いの解決を待つしか能がなかったのである。アンチオキウスとセルキウスも同様であった。彼らは、王冠と愛人をそれぞれに分離することの非現実性に気づくと、次にすることは待つことしかなかったのである。

Nous la faisons tous deux la femme d'un sujet!
 Régnons:l'ambition ne peut être que belle,
 Et pour elle quittée et reprise pour elle,
 Et ce trône où tous deux nous osions renoncer,
 Souhaitons-le tous deux, afin de l'y placer
 C'est dans notre destin le seul conseil à prendre,
 Nous pouvons nous *en plaindre* et nous devons *l'attendre*.
 (nous soulignons) 162-168

こうして、二人の王子を〈自然との死闘〉というヒロイズムの中心命題から逸らせ、自然との密着に埋没させたのは、母という自然の及ぼす力であった。人は生まれながらに母とのウロボロスの一体感に浸っている。それは心地よい楽園であるために、いわゆる子宮願望として誰ものこころの奥底に眠っているものだが、人間が胎児期から幼児期、成人期へと成長していくためには、母との一体感を離れ、母に投影していた母元型を收拾し現実を客観できるようになることが要請される。世界中の伝説、民話に広がる竜殺しはこのウロボロスの一体からの分離の神話的表現である。この神話的母殺しを達成するのに必要なものが、ヒロイズムとアニマという元型である。ところが、二人の王子にあってヒロイズムは跡形なく消滅している。彼らは母との密着の中で完全に去勢されてしまったのだ。二人の王子が双子であるということ自体、二人の個人としての未発達を暗示しているようである。アニマとは本来男性の内に潜む女性性

であり、心理学的に言えば、男性の表面に出ている男性性の影に当たる。そして、影であるが故に、それは多分に無意識的であり男性自身には気づかれることなく、適当な現実の女性に投影され担われる。二人の王子はアニマ元型をロドギユヌに投影するのだが、王子達の男性性の不足はこの投影を水準の低いものにとどめ、また男性的意識によるアニマの意識化を不十分なものとする。アニマは各段階で様々な様相で出現し英雄を援助するが、特に青年期では英雄にアニマ投影を喚起させることで、母元型に集中していた英雄のリビドーが母元型から引き離されていくことが重要なのである。もしこの引き離しが成功せず、いつまでも母元型の許に留まるならば彼は結局母によって食われ呑み込まれてしまうだろう。古代の神話、伝説には女神によって動物に変えられたり、呑み込まれたり食われたり殺された人間の例が至る所に見られる。それは女神（=母）の許から離れることができず、遂に人間としての自立にたどり着けなかった者の末路を示す神話的表現なのである。こうして、自立した自由な成人に達するためには、初めての強烈な恋の対象であった母親の下から逃れ去り自己を確立しなければならない。それはドゥヴロフスキの言う自然との死闘と相通ずるものでもあろう。このような心理的文脈から見れば、二人の王子は母元型であるクレオパトルの圏内を離れることができず、彼女に食われ去勢された〈永遠の少年〉に過ぎなかったのである。

母元型の力がいかに強力で子供たちをその支配下に止めおくかということは、アニマ元型を無力化しようとする意思に実現される。彼女の許にやってきた王子たちに、

Si vous voulez régner, le trône est à ce prix.

Entre deux fils que j'aime avec même tendresse,

Embrasser ma querelle est le seul droit d'aïnesse:

La mort de Rodogune en nommera l'aîné! 642-645

と要求する。これはロドギユヌを王妃に就かせまいとする意思と同時にアニマへのリビドー投影を遮断し、自分の配下に止めおこうとするのである。これに対して、既に母に呑み込まれている二人の王子にはなんら抵抗する術はない。

彼らを母親の支配下から脱出させるためにロドギユヌというアニマが現れる。ロドギユヌこそ王子達を自立に導く格好のアニマであり得たのである。このアニマが王子たちに要求したのは、端的に母親の首をとること、つまり母殺しであった。

Princesse, ouvrez ce cœur, et jugez mieux du nôtre,

Jugez mieux du beau feu qui brûle l'un et l'autre,

Et dites hautement à quel prix votre choix

Veut faire l'un de nous le plus heureux des rois. 1003-1006

王子たちが、このようにしてロドギユヌにその心を明かすように求めた言葉には未だ母親の保護から離脱していない幼稚さが見て取れよう。ロドギユヌの要求は彼らには思いもかけない途方もないものであったのだ。母親に去勢された王子達に母殺しなどなし得ないことであった*²⁷。ロドギユヌの選択にはもはや愛など入ってはいなかった。実際、彼女に選択などし得なかったのだ。

Le destin des États est arbitre du leur,

Et l'ordre des traités règle tout dans leur cœur.

C'est lui que suit le mien, et non pas la couronne. (nous soulignons)

J'aimerai l'un de vous, parce qu'il me l'ordonne;

Du secret révélé j'en prendrai le pouvoir,

Et mon amour pour naître attendra mon devoir. 933-938

ロドギユヌは和平条約の規定に従うしかなかったし、しかも彼女のつれあいであり、王となるべき人物を選ぶ権利は女王にあったのである。そこで、ロドギユヌは国家の義務に忠実に従う王女という役割を選択せざるを得なかったのであり、彼女自身の自我は、即ち女王への復讐という私怨は次のような形で表現されたのである。

Tremblez, Princes, tremblez au nom de votre père:

Il est mort, et pour moi, par les mains d'une mère.

Je l'avais oublié, sujette à d'autres lois,

Mais libre, je lui rends enfin ce que je dois.

C'est à vous de choisir mon amour ou ma haine.

J'aime les fils du Roi, je hais ceux de la Reine. 1019-1024

王女の義務として、女王の指名した王子と結婚するということと、夫ニカノル*²⁸の仇を討たねばならないと言う二つの義務に束縛されて、彼女の私的感情は女王への憎しみにはけ口を見出しただけだと言うべきだろう。ロドギユヌの王子たちへの最後通牒は王子たちを恐怖のどん底に落とし入れるものであった。

Appelez ce devoir haine, rigueur, colère:
Pour gagner Rodogune il faut venger un père.
Je me donne à ce prix, osez me mériter,
Et voyez qui de vous daignera m'accepter.
Adieu, Princes. 1043-1047

この時、セルキユスが

Ah! que vous me gênez
Par cette retenue où vous vous obstinez!
Faut-il encor régner? faut-il l'aimer encore? 1053-1055

と慨嘆したのに較べて、アンチオキユスは

Il faut plus de respect pour celle qu'on adore. 1056
C'est et d'elle et de lui tenir bien peu de compte,
Que faire une révolte et si pleine et si prompte. 1059-60

と言い、更にセルキユスの

Lorsque l'obéissance a tant d'impiété,
La révolte devient une nécessité. 1061-62

という台詞に対して、

La révolte, mon frère, est bien précipitée,
Quand la loi qu'elle rompt peut être rétractée,
Et c'est à nos désirs trop de témérité
De vouloir de tels biens avec facilité:
Le ciel par les travaux veut qu'on monte à la gloire,
Pour gagner un triomphe il faut une victoire. 1063-68

アンチオキユスは、このように返答している。ヒロイズムは常に安易を排し困難を選ぶという建て前を堂々と述べたのだが、所詮建て前に過ぎなかった。

Anti.:Je me sens affaiblir quand je vous encourage.
Je frémis, je chancelle, et mon cœur abattu
Suit tantôt sa douleur, et tantôt sa vertu.
Mon frère, pardonnez à des discours sans suite,
Qui font trop voir le trouble où mon âme est réduite. 1076-1080

〈アニマ殺し〉〈母殺し〉という難題を与えられて、二人の王子の取った態度は違っていた。セルキユスは出口の見つからない窮状に立たされて反抗に走り、王位も愛人も捨て去り闘争場裡から逃亡する。戦意放棄である。

Rodogune est à vous, puisque je vous fais Roi. 1110
J'ai trouvé mon bonheur, saisissez-vous du vôtre:
Je n'en suis point jaloux, et ma triste amitié
Ne le verra jamais que d'un œil de pitié. 1112-1114

ネルソンは、ここにアンチオキユスとの友情を代え難いものとするために舞台から身を引くという高貴な自己犠牲を読み込んでいる。そして、野心と栄光の世界を放棄した点でポリュウクト以上であるとまで述べている。^{*29}ただし、この作品中でただ一人悲劇的主人公であり得た^{*30}セルキユスも表面にではなく、影に追いやられてたいていのコルネイユ劇のごとくその悲劇性は悲劇的な啓示にまで達することなく終わってしまっているというのがネルソンの見解である。だが、友情のために一切を放棄すると言うことを、ネルソンは餘にも表面的に解釈してはいないか。セルキユスはヒロイズムから逃走したばかりでなく、クレオパトルとロドギユヌの二人の女性から突きつけられた要求からも逃走したのである。彼のできることは逃走であり回避でしかないのだ。《私は幸福を見出した》と語るが、それがどのような幸福であるにせよ、ヒロイズムにとって幸福は無価値である。一方、そして、アンチオキユスについては、その堅固で失われることのない希望の保持において最高のコルネイユ的英雄であるとまで断じている。^{*31}ところが、この英雄が取った手段は涙に訴え懇願することでしかなかったのである。まず、母親に対しては血縁という自然と涙という感情に訴えることである。

Et détournant les yeux d'une mère cruelle,
J'impute tout au sort qui m'a fait naître d'elle.
Je conserve pourtant encore un peu d'espoir:
Elle est *mère*, et le *sang* a beaucoup de pouvoir,
Et le sort l'eût-il faite encore plus inhumaine,
Une *larme* d'un *fils* peut amollir sa haine. 723-728 (nous soulignons)

Nomme encor notre amour une rébellion,
Du moins souvenez-vous qu'elle n'a pris pour armes
Que de *faibles soupirs* et d'*impuissantes larmes*. 1346-1348 (nous soulignons)

ネルソン自身認めるように、涙に訴えるというセンチメンタルな戦略^{*32}しかとれないアンチオキユスが何故ロドリグの系列につながる *généreux* と言えようか。^{*33}更に、ロドギユヌの本能的な愛がアンチオキユスに向かったことを、彼が長子であることの徴候とまでみなしている。^{*34}双子の王子の中で誰が長子であるかということはクレオパトルによって明かされることはないであろう。^{*35}それはクレオパトルにとって実質的な支配権の喪失を意味するからである。私は、クレオパトル自身も事実を知っていないのではないかと疑っているくらいである。女王に取っては、彼女だけが長子権をどのようにでも操作できるということで政略的には十分なのである。実際に、女王はアンチオキユスに向かって

Rodogune est à vous aussi bien que l'empire.
Rendez grâces aux Dieux qui vous ont fait l'aîné:
Possédez-la, régnerez. 1356-1358

と、言いつつ、セルキユスには

Le trône était à toi par le droit de naissance,
Rodogune avec lui tombait en ta puissance,
Tu devais l'épouser, tu devais être roi!
Mais, comme ce secret n'est connu que de moi,
Je puis, comme je veux, tourner le droit d'aînesse, (nous soulignons)
Et donne à ton rival ton sceptre et ta maîtresse. 1419-24

と言っているくらいであり、それは政治的操作の道具でしかなく、事実は不分明である方がよいのである。

アンチオキユスとセルキユスを高く評価するのは、初めに述べたように二人の間に見られた王位を譲り合うという〈combat amical*³⁶〉の高貴さを認めるからである。即ち、二人は王位と愛人をめぐっての妥協を許さないライバルなのである。初めに二人が思ったように、王位と愛人を分け合うようなことはできない。一方は王冠と美女を掌中にし、他方はすべてを失うしかないのである。このようにして、兄弟同士の対等性が失われようとしているとき、それを埋め合わせかつ超越するものとして彼らが持ち出したのが友情と言う価値であった。

Il faut qu'en ce grand jour

Notre amitié triomphe aussi bien que l'amour. (nous soulignons)169-170

Malgré l'éclat du trône et l'amour d'une femme,

Faisons si bien régner l'amitié sur notre l'âme,

Q'étouffant dans notre perte un regret suborneur,

Dans le bonheur d'un frère on trouve son bonheur. 191-194

Ainsi notre amitié, triomphante à son tour,

Vaincra la jalousie en cédant à l'amour,

Et de notre destin bravant l'ordre barbare,

Trouvera des douceurs aux maux qu'il nous prépare.197-200

このような一見高邁な友情に陶醉するのも勝手だが、上述したように、二人の王位の譲り合いには、王位よりもロドギユヌを獲得したいとする底意が隠れていたのである。これを真実な友情と命名することはできないだろう。そして、王位と愛人を分離するすることができないことが明白になったとき、友情に過酷な運命に対する慰謝を求める他なくなった。或いは、せめて自分達の正当性を友情に価値づけようとしたということである。そもそもこうした一見高邁なストイックな台詞に、

Anti.:Le pourrez-vous, mon frère!

Sel.: Ah! que vous me pressez!

Je le voudrais du moins, mon frère, et c'est assez,

Et ma raison sur moi gardera tant d'empire,

Que je désavouerais mon cœur s'il en soupire. 201-204

といった弱々しい言葉が続くのである。

真正で峻険なヒロイズムから墮落した兄弟達は〈人間的〉な価値を選択するしかなかったのだろう。もっとも、それも価値と言いうる実質をもったものではなかった。これらの人物群はキュリアス以来お馴染みの人物達であることは前述したが、所詮評価するにも足りないのである。

アンチオキユスとセルキユスはニカノルの正統性を継承する王として、シリアに君臨しその内的外的秩序を收拾維持すべき義務を課せられていた。それが英雄としての課題であったのである。ところが、そのような課題は一顧だにされず打ち捨てられ、ヒロイズムが背負うべき重荷は女王とロドギュヌという女性の手に委ねられた。これをドゥヴロフスキは〈性の倒錯〉^{*37}と呼んでいるが、ヒロイズムが男性から女性の手に委ねられたとき、その真正さは失われ、歪曲されざるを得なくなったのである。

政治的に言えば正統王朝の建設というヒロイズムに課せられた命題は、心理的に言えば母なるものからの分離、自己と同等の女性を獲得し協同して新たな王国＝家庭の建設を意味する。アンチオキユスとセルキユスはそのいずれにおいても挫折した。アニマの獲得に失敗したのは、根本的には王子達が母に包み込まれてしまっていたからだが、次に彼らがアニマ元型を投射したロドギュヌがそれを受け入れるだけエロスを発達させていなかったからである。ヒロイズムのもくろみはクレオパトルとロドギュヌの二人の女性の手に任せられることになる。しかし、先に述べたように^{*38}彼女たちは女性という性を持っているが故に、自身で正統性を打ち立てることができず、男性を媒介することによってしかそれは可能ではない。そのために、彼女たちのヒロイズムは屈折を蒙る。彼女たちが王子たちに要求した、〈母殺し〉、〈アニマ殺し〉のいずれもが、ヒロイズムの根源的な企図である〈自然との死闘〉を意味するものであったにもかかわらず、〈罪悪的〉な印象を免れないでいる。〈罪悪的〉とは、二人の王子におけるヒロイズムの消滅、換言すればクレオパトルという母元型に食われ去勢されてしまった王子達の不能の故に、ヒロインの英雄的企図が強いたやむを得ない振る舞いでしかなかったのであり、その実はヒロイズムであった。

§ 3 ロドギユヌ

ロドギユヌは、この戯曲におけるキー・パーソンである。もしこの王女が登場しなかったならば、母元型と子供との自立をめぐる闘争乃至葛藤、或いは呑み込む龍と英雄との争闘として比較的単純な図式に還元できただろう。コルネイユはこの戯曲の表題が『クレオパトル』ではなく『ロドギユヌ』になった理由を、エジプトの有名な女王と間違われてはならないからと、無頓着に何ごとでもないかのごとくぶっきらぼうな説明をつけているが*39、これはコルネイユ流の韜晦であって、こういう言葉を真に受けてはならないだろう。

政治的見地から言うならば、ロドギユヌが持つ比重は大きくはないはずである。この点で、多くの批評家が誤りを犯しているように思われる。彼女はパルティアの王女であり、シリアとは本来無関係である。ましてや、シリアに正統王朝を建てる義務などあり得ない。ロドギユヌがシリアと関わったのは、パルティアに捕囚となっていたニカノルと結婚したからである。ニカノルがシリアの正統な王位を代表し、そしてその長子がそれを継承することは疑い得ない規定であり、その長子が存在する以上、少なくともニカノルとロドギユヌとの間に子供ができない限り、シリア王朝の継承権に混乱は起こり得ないのである。ところが、クレオパトルを罰しようとしてシリアに遠征したニカノルは、逆に戦死しロドギユヌは捕虜となった。今ロドギユヌに残されたことは、

Pour rendre enfin justice aux mânes d'un grand roi,
Rapportez à mes yeux son image sanglante,
D'amour et de fureur encore étincelante,
Telle que je le vis, quand tout percé de coups
Il me cria: «Vengeance! Adieu: je meurs pour vous!» 858-862

と言いつつ死んだ夫ニカノルの仇を討つこと、そして彼女自身が受けた捕虜の屈辱を雪辱することしかないはずである。これはすべてクレオパトルに対する私怨であり、王位の正統性をめぐる政治的秩序の問題ではない。そもそもロドギユヌは自分自身を

Je suivais mon destin en victime d'État. (nous soulignons) 874

と納得していたはずである。彼女は完全に政略の道具でしかなかった。ニカノルとの結婚はパルティアがシリアを攻略するための口実を作るためであったし、今度はパルティアとシリアと

の和平の道具として、シリアの王妃となることが定められた。ロドギユヌ自身の台詞をもう一度引用しよう。

Mais pardonne au *devoir* que m'impose mon rang.
Plus la haute naissance approche des couronnes,
Plus cette grandeur même *asservit* nos personnes.
Nous n'avons point de cœur pour aimer ni haïr,
Toutes nos passions ne savent qu'*obéir*. (nous soulignons) 866-870

ロドギユヌが変わったと言え、シリアに来て、愛が芽生えたことである。つまり、彼女の中の眠っていたエロスが蠢動し始めたのである。これは男性がアニマの導きによって母元型を離脱するように、女性にとってもエディプスからの別離を促す大切な段階なのである。ロドギユヌは〈sourir〉によって図らずも自分の愛を洩らす、

Prince, qu'ai-je entendu? parce que je soupire,
Vous présumez que j'aime, et vous m'osez le dire! 1131-1132

とりあえず、それは亡き夫へのものであると取り繕う。

Lorsque j'ai soupiré, ce n'était pas pour vous,
J'ai donné ces soupirs aux mânes d'un époux 1153-1154

そして、自分の愛も王冠もセルキュスに譲るというアンチオキユスとの会話の中で、ロドギユヌは自分の心中に潜む深奥の思いを表出せざるを得なくなった。

Hélas! Prince.

Est-ce encore le Roi que vous plaignez?

Ce soupir ne va-t-il que vers l'ombre d'un père? 1198-99

Allez, ou pour le moins rappelez votre frère.

Le combat pour mon âme était moins dangereux

Lorsque je vous avais à combattre tous deux:

Vous êtes plus fort seul que vous n'étiez ensemble,

Je vous bravais tantôt, et maintenant je tremble.
J'aime; n'abusez pas, Prince, de mon secret,
Au milieu de ma haine *il m'échappe à regret,*(nous soulignons)
Mais enfin il m'échappe, et cette retenue
Ne peut plus soutenir l'effort de votre vue.
Oui, j'aime un de vous deux malgré ce grand courroux,
Et ce dernier soupir dit assez que c'est vous. 1200-1210

こうしてアンチキウスへの愛を吐露したロドギュヌには、義務と愛との葛藤というコルネイユ劇にお馴染みの主題が現れ、英雄的或いは悲劇的な超克の可能性がほの見えるかのようであるが、それが貫徹されたとは言い難い。ドゥヴロフスキはロドギュヌについて《ロドギュヌはアンチオキウスの背後で支配していくであろう、実際支配するに価する唯一の人物だ。なぜなら、一瞬たりとも君主制の企図と感情を混淆しないからだ》*40と、高い評価を与えているが、ロドギュヌは感情を超越したと言うよりも、〈victime d'État〉から、アンチオキウスに出会うことで感情を持った人間に変わったと言うべきだろう。従って、クレオパトルがセルキウスを王位継承者に選んでいたならば、義務と愛の相克というコルネイユ的悲劇が実現し得ただろう。そのような成り行きにならなかったのは、ロドギュヌ自身のヒロイックな奮闘のためではなく、全くの偶然のお陰である。つまり、アンチオキウスの背後でなら支配することができたかもしれないが、セルキウスの場合にもできたかどうかは断言できないだろう。彼女自身いかに王冠に関心を抱き、シリアの王朝の正統性を掌中にしようとしても、彼女自身の力ではできないことであった。二人の王子の媒介によるしかないのであるが、二人とも彼女の画策に同調はしなかったのである。

ロドギュヌの中にコルネイユに典型的な義務と愛との葛藤を見ようとするネルソンは、官能的乃至自然的な愛の現れを王女の内に明確に認めている。*41

Il est des nœuds secrets, il est des sympathies
Dont par le doux rapport les âmes assorties
S'attachent l'une à l'autre et se laisser piquer
Par ce je ne sais quoi qu'on ne peut expliquer. (nous soulignons)
C'est par là que l'un d'eux obtient la préférence:
Je crois voir l'autre encore avec indifférence; 359-364
Mais cette indifférence est une aversion

Lorsque je la compare avec ma passion.

Etrange effet d'amour, incroyable chimère! 365-367

ここに表白されたラシーヌ的な非合理的な愛には悲劇的な可能性が潜在している。しかし、またロドギユヌは〈victime d'État〉としての自身のアイデンティティを決して放棄するわけではない。

Quelque époux que le ciel veuille me destiner,

C'est à lui *pleinement* que je veux me donner.

De celui que je crains si je suis le partage,

Je saurai l'accepter avec *même visage*. (nous soulignons) 373-376

何の説明もつけられない不可解な愛の行く先は、人間の思いを越えて天の思量に委ねるしかない。愛するものと愛しないものとの果てしない差異にも関わらず、彼女はどちらも同様に《残すところなく》与え、《同じ表情を》して受け入れると言うのだ。このロドギユヌの態度に義務と愛の葛藤が伺えるだろうか。ここには何よりも政治的権力の争奪に一切を賭ける政略家の顔しか浮かんでこない。それが言い過ぎならば、国家のために自己を犠牲にしてはばからない王女の姿しか見えないのである。ロドギユヌにあっては王冠と自然の感情との価値の差異はクレオパトルと同様決定的なものであった。ロドギユヌが何故シリアの正統な王権に執着するのか、その理由は薄弱であることを前述したが、夫ニカノルの復讐の故にというならば、それは政治的動機からと言うより感情的動機からというべきであろうし、ニカノルと先妻クレオパトルとの間に王子が生まれている以上彼女がシリアの王位を要求する理由は薄い。従って、ドゥヴロフスキが言うように、《ロドギユヌだけが、君主制の正当な言葉を語っている》というのは、過大評価でしかないのである。彼女の行動には明らかに王位を奪取しようと言う〈ambitieux〉の要素が潜んでいる。^{*42}

そもそもロドギユヌとニカノルの実体的関係がどのようなものであったのか、それが真に愛情の交わされた関係であったのか非常に疑わしい。ネルソンはロドギユヌとニカノルの関係は愛人関係と言うより、父と娘の关系到近いと述べ^{*43}、従って、ロドギユヌのクレオパトルへの復讐はシメヌの様に〈家〉の名誉を傷つけられたことへの報復とみなされる。ロドギユヌがニカノルの復讐を求める背後には真に愛した夫のためというより、クレオパトルに敵対するための名分に過ぎないという印象が拭い得ないのである。従って、ロドギユヌのシリアの王位

要求には政治的妥当性はなく、私怨からそしてパルティアの国家利益に奉仕するためということができらるだろう。

ロドギユヌが母の強力な引力圏に囚われていた王子を離脱させるアニマになれなかった最大の理由は、彼女自身が自らの内なるアニムスに支配され、王子のアニマの投影を受け入れる準備ができていなかったためである。一度は自分の自然で官能的な愛を認め告白もしながら再度抑圧し、それを無意識の暗い影の中に放擲した。自分は〈victime d'État〉であるという、父から受け継いだ論理が優先して母から継承したエロスは抑圧され、十分な発達を遂げなかったのである。女性性の二要素のうち論理が打ち勝ち豊かな生命をもたらすエロスが未熟に保たれてしまった。もし彼女がそのエロスを十分に発達させ得たならば、高いレベルのアニマとなり得ただろう。ドゥプロフスキがクレオパトルについて言っていることは、むしろロドギユヌについての的確に当てはまるだろう。つまり、彼女こそ自分の性に逆らい、自らの女性性を開花することができなかつたのである。

無論、二人の王子におけるヒロイズムの喪失が、クレオパトルとロドギユヌの二人の女性の王冠をめぐる争闘を屈曲し、政治的にも心理的にも瓦解させたのであるが、とりわけ、母親に呑み込まれた王子達を救い出せなかつたという意味で、ロドギユヌの責任は大きかつたのである。彼女がそのアニマというアイデンティティを放棄することなく、英雄の導き手としての役割を固執したならば、王子達を英雄の道に復帰させる一縷の望みはあつたであろう。

ところで、ネルソンはロドギユヌとクレオパトルとどちらに復讐の根拠があるかという点に関して、プラグマティックな解決をコルネイユは示していると指摘し、ロドギユヌはニカノルの心を奪つたのに対し、クレオパトルはニカノルの生命を奪つたのだからクレオパトルの罪の方が重いとするのである。^{*44}この議論が疑わしいことは、註で論じたが、ネルソンは倫理的な議論を避け、父を殺した母を殺す報復は、劇作上古からの敬意をもたれた慣例であるとして決着をつけている。^{*45}ネルソンの議論で最も問題になるのは、ロドギユヌは本当にニカノルの心を奪つたのであろうかということである。ネルソン自身、二人の間に成熟した愛情関係が成立していた感じがしないと述べているように、ロドギユヌは自身何度も述べているように〈victime d'État〉であつたのであり、パルティアの政略のために自分自身を利用させることになんら躊躇いを持たなかつた。ロドギユヌがニカノルと結婚したのは、ニカノルがクレオパトルの不貞に憤激してシリアに攻め上ろうとしたのに乗じて、王女を娶せシリアの支配権を手にししようとするパルティアの画策に同調した故であろう。そして、シリアとパルティアの和平の徴としてシリア側の王位継承者と結婚することに同意したのも、パルティアの政治的意図を何よりも優先したからである。

このようにロドギユヌを解釈するならば、彼女も王子達を同じくヒロイズムを破棄して自立への欲求を挫折させた非一英雄と言えるのである。ただ、彼女の場合は母に呑み込まれたと言うより、父に食われてしまった。父元型から継承した論理が彼女の内で肥大し彼女を支配し振り回したために、母元型から受けたエロスは圧迫され、その生命に満ちた豊饒を開花させることにならなかったのである。ロドギユヌがアニマとして、王子達に援助の手を差し伸べられなかったのは、王子達のヒロイズムの喪失の他にこのような事情からでもあった。

§ 4 太母としてのクレオパトル

クレオパトルを理解しようとするとき、アリドルを持ち出したのはおそらくドルトが最初であろう。クレオパトルの

Sors de mon cœur, nature 1491

という句はアリドルの

Ma liberté naîtra de ma punition. *La Place Royale**⁴⁶ 260

を反響していると指摘している。^{*47}ドルトはクレオパトルはアリドルについて定義した意味においてまったきヒーローであるとし、アリドル的英雄について《コルネイユのドラマツルギーの転換点に我々は立っている。コルネイユは英雄を発見したのだ。そして、英雄を現実化したのが、たぶんに抽象的にである。よって、コルネイユが我々に示したのは、貴族的英雄の肥大化した傲慢で脆い像なのである。なぜなら、それはブルジョワが夢想したヒーロー、見せかけ(*le paraître*)に魅了せられて、その実体(*l'être*)を見せかけの下位に置いたヒーローだからである。このヒーローに取っては、すべての行為(*actions*)はパフォーマンス(*gestes*)となってしまう、世界と時間はただの一瞬間、ただ一度の現前に還元される。そこでは実体と見せかけが混淆して死に出口を見いだすことになる現実の極限に位置するヒーローなのである》^{*48}

アリドルとアンジェリックは深く堅固な愛によって結合されている。

Angélique: Alidor a mon cœur et l'aura tout entier; *La Place Royale* 40

Alidor: Mais las! elle est parfaite, et sa perfection

N'approche point encor de son affection;

Point de refus pour moi, point d'heures inégales; *La Place Royale* 191-193

しかし、この深く理想的なと言ってもよい愛がアリドルにとっては耐え難い苦痛となっているのである。

Rien moins, et c'est par là que redouble *ma peine*,

Ce n'est qu'en *m'aimant trop qu'elle me fait mourir*, (nous soulignons)

Un moment de froideur, et je pourrais guérir;

Une mauvaise œillade, un peu de jalousie,

Et j'en aurais soudain passé ma fantaisie; *La Place Royale* 186-190

アンジェリックとの何の障碍のない愛を压制と感じ、忌まわしい隷属とみなしたのはアリドルにとって愛を上回る価値、どんな代償を払っても放棄できない自由があったからである。その自由を得るには、アンジェリックの肉体が放つ余りにも蠱惑的な束縛・鎖を断ち切らなければならなかった。

Je n'ai que trop languì sous de *si rudes gênes*:

A tel prix que ce soit, *il faut rompre mes chaînes*,

(nous soulignons) *La Place Royale* 221-222

自然の属性の一つである美貌との争闘に入り、その圧倒的な魅了の力から自己を解放しようとする試行において、それはヒロイズムへの初歩的な一段階を印したと言えよう。しかし、アリドルが垂涎してやまない自由、確固たる自立性を求めて、その目的にとってはもっとも障碍であったアンジェリックを捨て去ったとき、アリドルは案に相違してヒロイズムの光輝を得ることなく、かえって出口のない袋小路に入ってしまったのである。彼は結局アンジェリックの美貌を断念するという自然との死闘で自らの意思を自由にできず、友人に譲渡するという姑息な手段に訴えたり、アンジェリックを無理に拐帯して他人のものにすると言う数々の背信行為を働くのである。^{*49}自由への投企はドゥブロフスキによれば〈自然との死闘〉に勝利して得られるものであるし、後述するごとく心理学的には、男性性の自我と意識を母なる無意識から解放することでもある。しかし、アリドルは男性性の最大の特徴である意志の薄弱を披露して真の自由への途を失ってしまうのである。

Cependant Angélique enfermant dans un cloître

Ses yeux dont nous craignons la fatale clarté,

Les murs qui garderont ces tyrans de paroître

Serviront de remarts à notre liberté.

Je suis hors de péril qu'après son mariage

Le bonheur d'un jaloux augmente mon ennui

Et ne serai jamais sujet à cette rage

Qui naît de voir son bien entre les mains d'autrui. *La Place Royale* 1518-1525

この『王宮広場』終幕を飾るアリドルの独白は、アンジェリックを断念する試行の不徹底さを余すところなく暴露している。つまりは、僧院の壁の中に物理的にアンジェリックを閉じこめることで、彼はアンジェリックとの分離にかりうじて成功したのである。ネルソンはアリドルに言及して、half-vilain and half-hero^{*50}と述べているが、これはドルトよりも後退した解釈と言えよう。〈vilain〉と〈hero〉の合成したキャラクタなのではなく、徹底した自由の希求という自ら打ち立てた意図を敢行しようとして意志の弱さの故に敗れ去った、不徹底、中途半端なキャラクタなのであり、これを徹底して完遂したのがクレオパトルである。そこでドルトのクレオパトル理解が次のようになされる。《クレオパトルはアリドルについて定義した意味で間違いなくヒーローである。女王の情念、その憎悪はむき出しの所有欲を表すものではない。クレオパトルが血に塗られた闘いをするのはただ王冠を保持しようとするためだけではない。それは何よりも自己自身であるためにであり、自らを万人を越えた者と置き、限界なき自由として措定しそしてかような者として自己自身に現前するためであった。》^{*51}

ここには単なる政治的争奪を越えて、自らのアイデンティティを確立しようとするクレオパトルの企図に対する理解の萌芽が伺える。このドルトの洞察がその後の批評において継承発展されなかったのは残念と言うしかない。クレオパトルを政治的闘争場裡と言う狭い枠組みを越えて把握する必要がある。ヒロイズムは心理学的に見るなら、母元型から抜け出て自立に向かっていく生育史上必然の闘いであると述べたが、ここでは更に一步進んで太母元型という見地からクレオパトルを掌握することにしよう。

ノイマンは、ウロボロスから大いなる女性を経て、グレート・マザーに、さらにはより分化した形へと発展した過程を記述しているが、それを簡単に要約して示そう。^{*52}始原に自分の尾を咬んで丸くなった蛇ウロボロスがある。これは意識や自我がまだ未発達で幼い原初状態の象徴であり、対立物を包含する《大いなる環》であって、そこでは陽と陰、男性性と女性性、

意識と無意識とが混ざりあっている。ウロボロスは男の陽、女の陽、男の陰、女の陰という四つの象徴要素を含んでおり、これらは一定の配列も秩序もないまま協同作用する。始原の状況の中で、幼い自我は母性的な保護（女の陽）と生命に対する敵意（男の陰）を同時に体験する。また貪り食う女性の力（女の陰）と積極的に自我と意識を支える力（男の陽）を体験するのも同一の対象を通してである。これらの要素の混在は状況を不可視のものとし、意識はそれを適切に把握することができない。次に、《大いなる女性》 *magna mater* と《大いなる男性》 *magnus pater* の区別が現れる。大いなる女性は母性的ウロボロス*⁵³とウロボロスのグレート・マザー*⁵⁴の二面を持つ。ここで女性性は陽と陰の両極を持つが、それは秩序だっていないので、自我にとっては予見不能、理解不能のものとししか経験できない。この女性性の優勢な原元型の影には、陽と陰の男性的要素が含まれている。大いなる女性という原元型から太母の形象が現れる。ここに至って、各要素の間が秩序づけられる。太母 *great mother* は三つの形を持つ。よい母、恐るべき母、よく一悪い母である。良性の女性的（及び男性的）要素は良い母を形作り、グレート・マザーの統合体から独立して現れうる。否定的要素からは恐るべき母 *terrible mother* が形作られる。第三の姿は、よくかつ悪いもの、即ち典型的グレート・マザーである。ノイマンはそれぞれのイメージを現す形姿として、恐るべき母としてゴルゴ、良い母としてソフィア、グレート・マザーとしてイシスをあげているが無論他にも多数の例が挙げられよう。このように、太母元型は母元型よりも一層蒼古的でありより自然に近く、従って無意識的であると言える。それは生の神と死の神という両面的な面を持っている。生の神としては万物を育み慈しみ産む神であり、死の神としては破壊、攻撃性、一切を呑み込み貪り食う神である。

これらの属性は矛盾するもので、同一の対象に組み込まれるとは思えないかもしれないが、女性性の基本的性格の象徴としてノイマンは VAS（容器）をあげている*⁵⁵。それは保護するものとして外界の敵意から擁護・養育するとともに、また一面自らの内にしっかりと包み込んで離さないものでもある。従って、生と死という矛盾した二面性は女性性の根本原理だと言える。

ノイマンは別の書で更に徹底的に、女性性の本性を暴いている。太母と自我との関係を始原から辿っていく。世界と無意識の圧倒的な力の下にある幼児神。彼の意識と自我は余りに無力未発達のために、母との葛藤はまだ生じず、ウロボロス近親相姦の中にまどろみ眠って、たまに目覚めるがそれは意識と言えるほどのものではない。幼児神はウロボロス近親相姦の中で生まれ、殺され、再生するというサイクルを繰り返しているが、太母との庇護、親密な関係は変わらない*⁵⁶。次に、意識がある程度自己意識を持ち始めると、太母の息子かつ愛人となり、太母とは性の関係で結ばれるが、それは男根と子宮との関係に限定される。アッティス、アドニス、タムズ、オシリスという近東文化圏の神々は母に産み落とされたというだけではない。

むしろ、この母子関係は背後に退き、彼らは母の愛人となり、彼女に愛され、殺され、葬られ、悲しまれ、再び産み返される*⁵⁷。そして、処女であり娼婦（あるいは売春婦）である太母つまり豊饒性の原理としての太母の側面がある。、処女とは後世の父権制がロマンチックに空想したように無垢の意味ではない。誰からも独立し、どの男性にも属さないということである。従って、懐胎し出産しても、彼女は処女である*⁵⁸。彼女は大地の豊饒に責任を持つので、男根崇拜という儀礼を司るが、この男根崇拜には常に授精者の無名性、男根の独立性を特徴としている。彼女にとって男根は個人的、人間的なものではない。それは豊饒儀礼*⁵⁹の一つの要素に他ならない。彼女は売春婦であって誰にでも身を与えるが、誰のものにもならない。男性は偉大な豊饒原理の代表者である聖なる太母に男根として奉仕するのみである*⁶⁰。最後に、太母の持つ恐るべき母の面を取り上げねばならない。この太母の否定面で、二つの特徴を見いだすことができよう。一つは血に飢えた残酷な本性であり他は彼女の魔力である。血への渴望は太母の豊饒の表現なのである。ノイマンは語る《大地の母胎は授精されることを望み、血の供物と屍体は彼女の好物である。最初期の豊饒儀礼では聖なる生贄は八つ裂きにされ、その血まみれの各部分が高価な宝として分配され大地に捧げられ*⁶¹、大地の豊饒性を作り出した*⁶²ノイマンの大女神についての要約を引用しよう。《女性の持つ情動的な荒々しい情熱の性質は、その放縦さのゆえに、男性と意識にとっては恐怖である。女性的な奔放さが持つ危険な側面は、父権的な時代には抑圧され誤解され、欺瞞的に矮小化されているが、初期の時代にはまだ生きた体験であった。この危険な側面は少年期の発達段階で体験されるとはいえ、すべての男性の深層に不安として潜在し、意識が抑圧し偽ってもこの層とその働きとを無意識のうちにもっている場合には、いつでも有害な働きをする。女性の情動的な野蛮と残忍はしかし、神話が語るように、より高い自然の法則、即ち豊饒の法則の下にある。この狂躁的な本性は乱交の祭り、つまり豊饒の祭りで発揮されるばかりではない。女性たちも、いや女性たちこそ入り乱れて狂躁的儀式を祝うのである。（略）この儀式の中心はほとんどすべて、神一獣ないし獣一神を狂躁的に八つ裂きにすることが中心であり、その八つ裂きにされた血まみれの肉片は食べられる。死と八つ裂きこそが女性の豊饒を、したがって大地の豊饒を決定する。*⁶³》女性こそこの世界の豊饒に責任を持つ唯一の存在であり、そのために男性の生贄を求めてやまない。この豊饒儀礼における女性が示した、野蛮、残忍、狂乱、陶酔、奔放、荒れ狂う情熱、激情は男性と男性の未発達な意識にとってこのうえない恐怖であり、畏怖的であった。それ故女性とは常に男性にとって魔力を秘めたヌミノースな存在であり、そのあらがいがたい魔力は太古の恐怖を大方失ったとはいえ未だに男性の無意識の深くで猛威を揮っている。解体と去勢、破壊と呪縛、殺害と惑乱という太母の性格一即ち、女性の原点というべき豊饒が隠す血への渴望と貪り食う貪欲、そして男性の意識を呪縛し魅了してやまないヌミノースを次第次第に見

抜き、その圧倒的な力の専制から抜け出るには、長い歴史をかけて男性的自我意識を発達させ強靱にして対抗することが必要だったのである。

太母の姿形をもう少し具体的に理解するために、二人の著作から引用する。最古の英雄詩『ギルガメシュ』の研究の中で、クルーガーは人類の始原に登場した太母の形姿を大要次のように述べている。

〈タムズの死はイシュタルの貪るような情熱、夏の灼熱によって引き起こされる。しかし、彼女は毎年彼を冥界から連れ戻すのである。彼女が冥界に行っている間、地上では殖生、生殖、成長のすべてが止まってしまう。ベールを被ったイシュタルは、花嫁、生命を与える春である。ベールを脱いだイシュタルは冥界の性質を帯び、死をもたらす愛人を殺す。彼女は死をも含む生命そのものであり、生命を与えるとともに破壊する。両価的な太母の元型に属する。しかし、彼女には母や恋人以外の面がある。彼女は「天と星の女王」であり、星の軍勢を率いる。ウルクでは愛と母の女神だが、北部のアッカド、ニネヴェではこうした性質を持っている。偉大な宿の主人としては、ディオニソスの特性も持っている。また、ビーナスでもあり、その紋章は8、あるいは16の光線をもつ星である。イシュタルのこういった多くの特徴、彼女の両価的、全体的な豊かさは彼女に捧げられた古い祈りの中を感じられる。〉^{*64}キャンベルは次のようにインドの神話を引用している。《ある静かな日の午後、ラーマクリシュナ^{*65}は一人の美女がガンジス河から上がって来て、彼が瞑想している森に近づくのを目撃した。子供を産もうとしているところであるのにかれは気づいた。やがて、子供が生まれ、女はやさしく授乳した。しかし、ほどなくして、女は恐ろしい形相で幼児を醜く歪んだ口に運んで噛み砕き、むしゃむしゃと食べ出した。幼児を呑み込んでから、女はもと来た方向にとって返し、ガンジス河に姿を消した。この荘厳な女神の顕現を余すところなく確認できるのは、一人最高の悟りに達した天才だけである。凡夫の眼に映る女神の輝きはもっとぼんやりしていて、彼らの未熟な能力に適する程度に配慮した姿しかあらわさない。心の準備ができていない者が女神の全貌を凝視すれば、恐ろしい目に会わずにはすまないであろう。――それは牡鹿となった元気溢れる若者アクタイオンの不幸な例にみられるとおりである。アクタイオンは聖者ではなかった。ほんらい、通常の間人（幼児性を持った人間）が抱くバランスを失した欲望と驚きと恐怖を抜きにして見なければ目に映らない御姿の顕現にたいして、かれは心の準備のできていない狩人に過ぎなかったのだ。^{*66}》この節を理解するにはキャンベルの次の考えが参考になろう。《女神は誘惑し、導き、英雄に足枷を破碎するよう命じる。そして英雄が女神の意向にあわせていけるととき、知るものと知られるものとの両者はいっさいの制限から解き放たれるであろう。女性とは感覚的冒険の聖なる極致へ導く者である。凡庸な眼に触れば女性は必要以上に劣った状態に貶められ、無知からくる邪悪な眼に触れば女性は陳腐醜悪な状態に呪縛される。反対に悟りを開

いた者の眼に触れるならば救済される。彼女が必要とする愛情と確信とをもって、はなはだしい動揺をしめさず彼女をありのままにみつめられる英雄は、潜在的には、彼女の創造した世界における王たる者であり、神の化身であるのだ。^{*67}これは女神のもつ魔力に幻惑されないためにどれほど意識を研ぎすまさなければならぬか語るものだし、《太母（キャンベルに従えば宇宙母）の形姿は、現実において最初に養育し保護するものが持っている女性的属性を宇宙そのものに帰属させることで成り立っている。この幻想は主として自然発生的なものである—というも幼児の母親にたいする態度と成人の周囲の物質世界にたいする態度とのあいだには、明瞭かつ密接な対応関係が存在するからである。》^{*68}ここでキャンベルは女性が男性に対してもつ強力なヌミノースの起源を生育史的に説明している。それは人間が生まれて初めて関係を持つ対象（一般に女性）との間に成立する関係の普遍化に始原を有する。圧倒的な母の力・その支配力、それに比べて自己の無力、この大きな差異が現実の生身の母にそれをはるかに越えた元型的イメージを投射する結果になる。こうした生育史的説明と、先に挙げたノイマンの人類史的説明は相俟って女性と男性的自我の関係を解釈することになる。個人的レベルでは成長により、また人類史上では母権制から父権制への移行により女性に投げかけられた元型的イメージは次第に撤収されていくが、否認されるわけではなく抑圧されて無意識の深みに入り込み、そこで猛威を揮うのである。従って、現代の男性にしても意識から消えて無意識に沈んだ女性の有する魔力に捕縛されアクタイオンのごとく八つ裂きにされ噛み砕かれ去勢されているのである。これを避けるには、キャンベルの言に従えば女神に対して幼児性のない成熟した態度で向かい合い、そのヌミノースを避けることであり、アクタイオンの如き凡夫は女性の魔力に八つ裂きにされるしかないのである。

太母は善悪、美醜、正不正と言う分け隔てを越えた無数の属性を持つが、特に血への渴望は彼女の豊饒性を示すもので、その養育と破壊の両価性はその存在にとって不可欠であり同一であった。この豊饒の大女神がなくては、地上は不毛に帰するであろう。ただ自我や意識が原始人や子供のように無力・脆弱なものである場合、人間はその圧倒的な重力圏の中で振り回され噛み砕かれることになる。人間はできる限り意識のエネルギー量を大きくし、太母＝容器の放つ心的引力を脱出しようとしなければならない。心理学的に見れば、これが自由の意味である。この過程でヒロイズムが関わる。英雄神話は、幼児から成人への成長の過程に見られる母なる無意識と男性的自我意識の葛藤という個人発達史と母権制から父権制への系統発生史の両方に関係する。

ここでは個人史に限定して述べると、太母との強烈な離れ難い初恋から分かれ、意識を発達させ、両親からの分離、両親間の識別、家庭からの巣立ちに対する恐怖を克服し、世に自分の個人的自律性を確立するためにはヒロイズムの持つ大胆な探求心と意志の強度が必ず要請

される。そして、成長が進み青年移行期に達すれば、男子はヒロイズムの一層の活性化とアニマ元型*⁶⁹の出現、女子ではヘタイラとアニムス元型*⁷⁰が活性化して、親元型の持っていた強烈な支配力が弛緩し薄れ、ついには両親に投影していた親元型が引き上げられるに至る。もしこの過程が順調に推移しなければ、太母及び太母から分化した母元型に呑み込まれることになる。太古の神話によく出てくる話しでは食われてしまうのだ。息子に対する呑み込みとしては、母という異性から分離できないため同性の内にも異性を求める同性愛として現れたり、すべての女性に母の万能の愛を希求するがために、消尽した女性に捨てられ、再び（理想の）女を探して終わることなき放浪を続けるドン・ファンとなったりする。娘に対しては、母によってその養育性が一方的に強化されるために、女は産むだけが使命の家事と子育てだけに生きる典型的な母親になる。逆に母によって女性本能が弱められたり消失されたりすると、その代償として、母の持つ女性性への嫉妬と母を陵駕しようとして、性的冒険にでかけるがたいはいは失敗に終わる。^{*71}

太母に食われることを避けるには、英雄の逞しい意志で太母との闘いに勝利すること、そしてその結果得られるアニマという性愛対象によって人生で最初のそしてもっとも激しい母との恋を断念させてくれることが必要なのである。上述した言葉を使用すれば、ウロボロス近親相姦という樂園との切り離しを可能にするのは、強烈な男性的な意識とアニマの牽引力なのである。アニマとは本来グレート・マザーから分離・分化したものであり、様々な段階がある。初歩的なエロチックなアニマ、ロマンチックなアニマ、宗教的なアニマ、叡知的なアニマ（アテーナー、アルテミス*⁷²、菩薩）と段階が上がるにつれて自己との繋がり強いものとなる。アンチオキユスとセルキユスの二人がクレオパトルという太母に呑み込まれ去勢されてしまったのは彼らの意識が弱かった（ヒロイズムの消失）のと、アニマ＝ロドギユヌの牽引力が足りなかったからである。それは彼らのもつアニマ像のレベルが低かったことを意味している。キャンベルに従えば、二人の凡庸な眼がロドギユヌの放つ魔力にからめ取られ、二人とも食いちぎられたと言えよう。もし意識化が不徹底ならば、男の子は永久に両親の影から、特に母の呪縛を逃れることができずいわゆる〈永遠の少年*⁷³〉で終わってしまうだろう。アンチオキユス、セルキユス兄弟はその典型的例であった。

ここまで考察を進めれば、何故クレオパトル一人がこの作品中で、英雄的に見えるか、厳密に言えばエネルギーに横溢しているか理解できよう。女王を道徳的に理解し評価することは全くの見当外れとしか言いようがない。そのようなことでは、クレオパトルのもつ魅力、或いは魔力を解明することはできないであろう。19世紀になってニーチェ哲学の影響を受けて、〈善悪の彼岸〉という考え方をコルネイユの英雄に適用しようとする動きが出てきた。^{*74}しかし、クレオパトルにそのようなニーチェ哲学の尻尾を掴まえようとするのはあくまでも間違い

であろう。女王の無意識深くには太古の神話に頭に表現されていた太母元型が強く作用しているのであって、近代の意識がもつ善悪、美醜、正不正といった区々たる分け隔ては意味をなさないのである。クレオパトルがここで希求したことは、ただ一つ我がアイデンティティを純正で無傷なものに保つことであった。クレオパトルの振る舞いは、ドルトが信じたように自らの栄光のために王冠を求めたのでもなければ*⁷⁵ドゥヴロフスキの評言《クレオパトルの魂の偉大さは、ある人々が認めたようになんら猛獣の猛々しいエネルギーの展開にあるのではなく、反対に、絶対王政を建てようとした女性の優れて人間的な努力にあった。》*⁷⁶が示唆するように、政治的・倫理的な力闘に限界づけられるものでもなかった。王冠は権力を意味すると言うよりも、クレオパトルにとっては大地の豊饒のシンボルであったのである。クレオパトルが何物にも束縛されることのない英雄的自由を希求した意志の剛直さにおいて、オラースと匹敵すると言えるかもしれないが、オラースが国家の創建という一つの価値の創出に奉仕しようとした点であくまでも人間的なヒロイズムの轍を抜け出すことはなかったのに対し、クレオパトルのエネルギーはオラースの極限的ヒロイズムさえ超えて、自らの属性を宇宙的で半神的な属性にまで高揚し定立しようとした点で、宇宙的な射程を持つ遠大な規模のものであったのである。女王の行為が近代的な矮小化された道徳観によって裁かれようと、近代文明の矮小化され萎縮した精神にとって血に飢えた獰猛な獣のように見えようと、彼女の太母の色彩に彩られた超人的な魔力の放つ力は我々の無意識を強く捕縛し魅了し、我々を知らず知らずに捕らえているのである。女王が、実にクレオパトルだけが女王、それも夜の女王と言う呼称にふさわしいのだが、毒杯を仰いで言った最後の言葉は、この世への未練がましい別離などではなくもはや生死をさえ超越した大女神が吐露した自己定立の宣言に他ならなかった。

Je maudirais les Dieux s'ils me rendaient le jour,

Qu'on m'emporte d'ici: je me meurs, Laonice,

Si tu veux m'obliger par un dernier service,

Après les vains efforts de mes inimitiés,

Sauve-moi de l'affront de *tomber à leurs pieds*. (nous soulignons) 1826-1830

クレオパトルは、あらゆるものを産み出しかつ破壊するという太母としてのアリバイ、自己主張、自立性、自己のアイデンティティを完全無欠に無傷のまま保持し得たが、そのことがドルトの言うように、自らに〈限界なき自由*⁷⁷〉を定立すことを意味したのである。権力の追求、王国の建設、復讐の達成、道徳性の保持、個人的な栄光の追求などそれに比較するならば、とるに足りない無価値なものであった。女王の企てを妨害するなら、神々さえ呪わずにおかないと言う言葉は、彼女が自身をどのような存在にも拘束され得ない存在と自覚していることを示唆している。彼女が毒盃を仰ぎ冥府に降るのはそこが太母の住処だからである。冥府は

その主プルートーが富を意味するように、豊かな尽きることのない無意識の世界である。そこでクレオパトルは無意識界の保有する無尽蔵の豊潤に浸ることで、意識界でひからびた生命を蘇生させ、再生することであろう。彼女は不死身の存在なのである。クレオパトルの念願した太母としての自己定立の企図は凡庸な人間には理解しがたいかもしれないが、個人的な精神史の中において、人類の意識の発達史においても深い人間的射程と意義を持った投企であったと言えるべきであろう。

NOTES

- * 1 Éd. L'Intégrale Seuil 1963 p.417 以下コルネイユからの引用は André Stegmann 編集になる Éd. L'Intégrale, Seuil 1963 に依る。なお、この作品にはコルネイユのものとしては例外的に邦訳がある。『コルネイユ名作集』所収、「ロドギユヌ」伊地智均、竹田宏訳、白水社 1975cf.
- * 2 cf. *Discours de la Tragédie*, *ibid.* p.832
- * 3 cf. *Discours du poème dramatique*, *ibid.* p.826
- * 4 *ibid.* p.826
- * 5 cf. S.Doubrovsky *Corneille et la dialectique du héros* Gallimard p.289
- * 6 ネルソンもアブラハムも同様の見解を述べている。cf. R.J.Nelson *Corneille, His Heroes and Their Worlds* University of Pennsylvania Press 1963 p.145 Claude Abraham *Pierre Corneille* Twayne Publishers 1972 p.88
- * 7 cf. Doubrovsky, *op. cit.* p.288
- * 8 この点で、ネルソンの評は的確である。«In *Rodogune*, Corneille gives full vent to his love of invention, manipulation, and theatricality. From the un orthodox exposition to the harrowing *coup de théâtre* with which the play closes, Corneille assaults his spectator with shocking demands, upsetting threats, and surprising revelation.» R.J.Nelson, *op. cit.* p.139
- * 9 1680年4月25日から1973年12月31日に至るコメディーフランセズにおけるコルネイユ作品の上演回数を見ると、『ロドギユヌ』は上から六番目に当たる。cf. *EUROPE* Avril-Mai 1974 selon Sylvie Chevalley
- * 10 この戯曲のタイトルがクレオパトルではなく、ロドギユヌになっていることについて、もしクレオパトルとしたら有名なエジプトの王妃と取り違えられただろうからとコルネイユらしい言い訳を付しているが、この作品の主人公がクレオパトルであることは異論のないところとしても、ロドギユヌは決してコルネイユが言うように *épisodique* な人物ではない。ある意味では対抗しうる登場人物なのである。cf. dans *Appian Alexandrien* Éd. L'Intégrale p.416
- * 11 *ibid.*
- * 12 実を言うと、メデの神話群はそれほど単純なものではない。彼女も、後に触れることになるがクレオパトルと同様に太母であったのであり、この神話の太古には豊饒儀礼が潜んでいた。

- * 1 3 toi はロドギユヌを指す。直前の行では vous と呼んでいたのが、419 行で tutoyer に転じ、以下最後まで続くのも見逃してはならないであろう。ここではほんの一部しか引用できなかったが、クレオパトルはこの独白の中でロドギユヌに対するたぎりたつ憎悪をみなぎらせている。
- * 1 4 le roi でなく、le monarque を使用しているのは、le roi は血生臭い権力闘争に勝利して支配権を掌握しているに過ぎず、le monarque のように権威と正統性に裏打ちされているわけではないという区別をするためである。
- * 1 5 cf. S. Doubrovsky, *op. cit.* p.295
- * 1 6 cf. Bernard Dort, *Corneille dramaturge*, L'Arche, 1957,1972, p.70
- * 1 7 *ibid.* p.71
- * 1 8 cf. Paul Bénichou, *Morales du grand siècle*, Gallimard, 1948
- * 1 9 S. Doubrovsky, *op. cit.* p.300 souligné par nous
- * 2 0 souligné par nous
- * 2 1 S. Doubrovsky, *op. cit.* p.298
- * 2 2 souligné par nous
- * 2 3 souligné par nous
- * 2 4 女性が劣等な性であるということは、コルネイユの劇的世界においてその様に設定されていたという意味であって、私の意見ではない。コルネイユのヒロイン達が自分に与えられた性と死闘を演ずると言うことは、性という最も頑強な自然との闘いに入るという意味で、ヒロイズムが自らに課した最上の困難な課題と言える。従って、後半のコルネイユ劇が、しばしばヒロインとその性との死闘をめぐる展開することになるのは必然なことでもあった。
- * 2 5 *ibid.* p.292
- * 2 6 cf. S. Doubrovsky, *op. cit.* p.290
- * 2 7 ここで言う〈母殺し〉と言う言葉は心理学的用語であって、母親からの独立を意味するメタファーとして解釈しなければならない。
- * 2 8 ステグマンは、コルネイユはロドギユヌをニカノルの fiancée としていると註をしている。cf. Éd. L'Intégrale, p.430 コルネイユ自身も 1660 年の EXAMEN の中で、史実を変えたのは自分の創意だと主張しているが、これは批評家の重箱の隅をつつくような非難に切り返したような意味合いが強い。ロドギユヌをニカノルの妻とすると、彼女は夫の息子を受するわけで inceste になるというのである。こういう議論の無意味さについて詳述する気はない。本稿では夫ニカノルと記述するが、婚約者ニカノルと読み変えるのは自由である。

なお、語学的に見れば、*époux* の語源はラテン語 *sponsus* (*spondere* 約束する、誓約する、の過去受動分詞) に遡及するが、ラテン語では婚約者、花婿、新郎と広く使用されていた。婚約者という第一義はかなり後世まで残存したようで、Nicot には *Epoux*: 《*Est celui qui n'est que fiancé, et ne se peut encore porter pour mari*》 *Trésor de la langue française*, 1606 とある。cf. Éd. Nouveaux Classiques Larousse p.98

- * 29 cf. R. J. Nelson, *op. cit.* p.145
- * 30 ネルソンはセルキユスについて *his tragic or potentially tragic character*(my italics)と周到な言い回しをしている。 *ibid.* p.148
- * 31 cf. *ibid.* p.149
- * 32 *ibid.*
- * 33 *ibid.* p.143
- * 34 *ibid.* pp. 148-149
- * 35 ネルソンも同様の意見である。 *ibid.*
- * 36 *ibid.* p.143
- * 37 cf. ci-dessus, 註 26
- * 38 cf. p.6
- * 39 Éd. L'Intégrale, p.416
- * 40 S. Doubrovsky, *op. cit.* p, 298
- * 41 cf. R. J. Nelson, *op. cit.* p.151
- * 42 ネルソンは 《*at times Rodogune sounds as ambitious for the crown, that public testimony of supreme worth in the play's universe, as Cleopatre*》と述べ、R. J. Nelson, *op. cit.* pp.151-152 ドウヴロフスキでさえ、彼女の *générosité* に些少の疑問を投げかけている。cf. S. Doubrovsky, *op. cit.* p.300 王位が至上の価値を持つことはクレオパトルとロドギュヌにとっては自明であった。しかし、シリアの王位を確保しようと言う政治的動機において二人の間には大きな落差がある。クレオパトルには確固とした正当性があるが、ロドギュヌにはない。
- * 43 *ibid.* 《*Like Chimene, she claims to be defending a dead hero and, in fact, her relationship to the dead Nicanor is more that of daughter to father than that of mistress to beloved:*》 p. 151
- * 44 この点は決して明瞭なことではない。クレオパトルはニカノルの死亡という知らせを聞き、かつトリフォンの謀反によって窮地に追いつめられたあげくやむなくアンチオキユスと結婚したのであり、女王自身が主張したように潔白と認めることもできるだろう。ただ、それをニカノルがあくまでも裏切り行為と解釈し、シリアに攻め上ってきたために、戦鬪を交える他なくなり、ニカノルの戦死によって女王は夫殺しという汚名を蒙ることに

なったのである。ロドギユヌの場合は、ニカノルの正妻クレオパトルがいることを承知の上で結婚しようとしたのだから、むしろ罪は重いとと言えるのである。作品全体を通して、ロドギユヌとニカノルとの間に愛情関係が存在した形跡は伺えない。もしあったとすれば、ロドギユヌの心中にニカノルへの愛とアンチオキユスへの愛との葛藤が見られただろうが、そのような形跡はない。彼女はパルティアの政略の道具にしか過ぎなかったのであり、ロドギユヌが唱える復讐、仇討ちはクレオパトルと闘うための単なる名目にすぎない。

- * 45 もっとも著名な例はオレストの母殺しが、女神アテーナーなどの寛大によって赦されることがある。これは、文化人類学上母権制から父権制への移行を意味するなど様々な議論があるが、ここでは劇作上の〈慣例〉で一応納得しておくが、クレオパトルの復讐とロドギユヌの復讐とどちらにより理屈があるかという問題は簡単ではない。
- * 46 *La Place Royale* を含めて、初期喜劇についてはテキスト上の問題がある。コルネイユの作品や全集は通例、彼の最後の作品集となった1682年の版を底本として編集されているが、この版と初版との相違は初期喜劇において著しい。これは1660年に出された著作集で大幅な書き直しがされたからである。従って、初期喜劇を論ずるには初版をテキストに採用するのがよく、実際初版本の *éditions critiques* が出版されており、また近年刊行された *Éd. Pléiade* でも初版を底本としている。拙稿「『王宮広場』におけるアリドールの愛」*エイコス* 1、1977 でも J. C. Brunon が初版を基として編集した *La Place Royale ou l'Amoureux extravagant, Didier 1962* を使用した。ただし、本稿では *La Place Royale* を論ずることが主眼ではないので、全集の統一性を維持すると、Brunon の版では *orthographe* が当時のもので、著しく古体の印象を与えかねないのでステグマンの版に従っている。
- * 47 Bernard Dort, *op. cit.* p. 72
- * 48 *ibid.* p. 46
- * 49 cf. 拙稿 「『王宮広場』におけるアリドールの愛」 *op. cit.*
- * 50 R. J. Nelson, *op. cit.* p. 157 アリドルについて〈patchwork character〉という言い方をしているが、ネルソンの理解の仕方をよくあらわしていよう。 *ibid.* pp. 61-62
- * 51 Bernad Dort, *op. cit.* p. 72 *souigné par nous*
- * 52 cf. エリッヒ・ノイマン、『グレート・マザー』福島章他訳 ナツメ社 1982 pp. 35-40
- * 53 母性的ウロボロスとは、大いなる女性の中のウロボロス（始原性、完全性、一体性）が強調された場合であり、母性的要素は2次的となる。
- * 54 ウロボロスのグレート・マザーと言うときは、グレート・マザーの要素が優位にある。（母性の持つ養育性と、それと裏腹な呑み込みの二面）

- * 5 5 エリッヒ・ノイマン、*op. cit.* p.42
 - * 5 6 エーリッヒ・ノイマン、『意識の起源史』 上 林 道義訳 紀伊国屋書店 1984 pp.86-88 ここではきわめて簡約に意識の始原と目覚めを示したので、おそらく分かりにくいであろうが、できれば、ノイマンの名著を読んできたい。
 - * 5 7 *ibid.* pp.90-98
 - * 5 8 *ibid.* pp.99-100
 - * 5 9 太古の豊饒の呪術はオリエントを中心として、エジプト、カナン、クレタ、ギリシアなどで広く行われたが、そのやり方は大体、年度王の屍体を八つ裂きにしその肉片は大地に埋め、血は大地に注がれた。そして、男根は防腐処置を施して保存し豊饒の保証とした。この儀礼には太母崇拜の血腥い狂躁が伴っていた。
 - * 6 0 *ibid.* pp.99-100
 - * 6 1 *souigné par nous*
 - * 6 2 *ibid.* p.102
 - * 6 3 *ibid.* pp.107-108 *souigné par nous*
 - * 6 4 cf. クルーガー、『ギルガメシュの探求』 氏原 寛監訳 人文書院 1993 pp.149-150
 - * 6 5 ヒンズー教の偉大な聖者
 - * 6 6 cf. ジョゼフ・キャンベル、『千の顔をもつ英雄』 上 平田武靖、浅輪幸夫監訳 人文書院 1984 p.136
 - * 6 7 *ibid.* p.137
 - * 6 8 *ibid.* p.134
 - * 6 9 アニマは男性のうちにある女性性を指す。男性は自らの意識において男性と任じていても、無意識にはその反対の性を隠し持っている。それを発見し、自らの人格に統合することができれば、男性のこころは全一的なものとなる。
 - * 7 0 アニムスは太母から父性的な力によって分化したものである。女性のうちにある男性性である。女性にとっても、自らの内なる異性を意識化し統合することはそのこころの発達にとって必要であり重要である。
 - * 7 1 cf. スティーブンス、『ユング、その生涯と心理学』 佐山堇子訳 新曜社 1993 pp.158-173
 - * 7 2 アルテミスは、キャンベルの引用中では太母に入れられているが、ノイマンは高度のアニマとしている。cf.ノイマン、『意識の起源史』 上 p.152 大いなる女性、太母、アニマの境界は流動的であり、また、著作家の意見も一致していない。
- ただ、これらに一貫するのは女性性であり、その点で変わりはない。

- * 7 3 *puer aeternus*, Von Franz 女史はこれを人格障害の一例と見て、『永遠の少年』 松代洋一、椎名恵子訳、紀伊国屋書店 1982 の中で、Saint-Exupéry を例にあげて分析をしている。心理学的要素は常に両面をもつてることを注意する必要があるだろう。フランツ女史は余りにも否定面を強調しすぎている。cf. 《ユングは、永遠の少年が子供元型を表すと考えた。そして、その繰り返し湧き出る魅惑は、人が自分自身を新たに再生できないことの投影から生じると考察した》 サミュエルズ、『ユング心理学辞典』 山中康裕他訳、創元社 1993
- * 7 4 cf. E. Faguet, *En lisant Corneille*, Hachette 1914 p.97
- * 7 5 cf. Bernard Dort, *op. cit.* p.72
- * 7 6 S. Doubrovsky, *op. cit.* p.300
- * 7 7 cf. ci-dessus, 註 54